

司書養成科目のためのテキストブックにおける 巻末索引の形式的特徴

A Study on Formal Characteristics of Indexes in Textbooks for Librarian Training Courses in Japan

仲村 拓真, 吉岡 一志
NAKAMURA Takuma, YOSHIOKA Kazushi

要約

司書養成科目のためのテキストブックに付与された巻末索引の形式的な特徴を明らかにすることを目的として、1950年から2025年までに日本で刊行されたテキストブック220冊を参照し、その内容を分析した。結果として、179冊(81.4%)のテキストブックに索引が付与されていた。一般的な図書と同様に、ほとんどのテキストブックで、見出し語に字下げや改行式が用いられており、見やすさが確保されていた。また、レイアウトでは、本文より小さいポイントが用いられ、複数の段が設定されることにより、多くの索引語を掲載する工夫がなされていた。副見出し語やを見よ参照は、他の主題の図書よりも多く用いられているものの、相互参照は、まだ十分に普及しているとはいえない状況であった。

キーワード：教科書, 内容索引, 図書館情報学教育, 高等教育

Abstract

This study aims to clarify the formal characteristics of back-of-the-book indexes appended to textbooks for librarian training courses. To achieve this, 220 textbooks published in Japan between 1950 and 2025 were examined and their contents analyzed. The results showed that 179 textbooks (81.4%) included an index. Similar to general books, most textbooks employed typographical devices such as indentation and line breaks for index headings, ensuring readability. In terms of layout, smaller type sizes than those used in the main text and multi-column formats were commonly adopted to accommodate a larger number of index terms. Although subheadings and 'see' references were used more frequently than in books on other subjects, the use of cross-references was still insufficient and cannot be regarded as fully widespread.

Keywords: Indexing, Librarianship, Higher Education

1. 研究の概要

1.1 研究の目的および背景

本論文の目的は、日本で刊行された司書養成科目のためのテキストブックに付与された巻末索引の形式的な特徴を明らかにすることである。

日本では、図書館法によって、司書資格を取得するためには、大学において「図書館に関する科目」を履修し、大学を卒業するか、一定の条件を満たした者が、司書講習を修了する必要があると定められている。さらに、図書館法施行規則によって、「図書館に関する科目」や司書講習の科目（以下、これらの科目を総称して「司書養成科目」と記す）が定められてきた。そのため、全国の大学で、司書養成科目が開講されてきた。そして、司書養成科目のために、複数の出版社から、各科目に対応したテキストブックが刊行されてきた。

本論文で着目する巻末索引とは、一般に、図書の末尾に配置され、当該図書で登場した主要な概念を検索できるようにした、いわゆる内容索引である。一般に、テキストブックは、学習の際に、内容の一部を繰り返し参照することが想定される。そのため、他の図書に比べて、テキストブックは、索引が付与されやすいと考えられる。そして、適切な索引を付与することは、テキストブックを活用しやすくし、学習に役立つといえる。

経験的に、日本は、海外に比べて、索引が十分に付与されていないといわれてきた。そして、その実態を明らかにするため、これまでいくつかの研究がなされてきた。

とりわけ、索引の付与について、仔細に調査した論考として、福永智子らと野末俊比古らの論考が挙げられる。福永らは、東京大学総合図書館の所蔵資料を標本として、哲学、経済学、数学、建築学の図書を調査し、巻末索引の有無や分量、排列、副見出し語、参照、凡例などの実態を明らかにしている¹⁾。さらに、野末らは、福永らと同様の調査を行い、巻末索引の標準的なレイアウトを示している²⁾。

また、領域ごとに、索引の付与を調べる試みも行われてきた。たとえば、阿部悦子は、学問分野ごとの巻末索引の相違について検討している³⁾。山崎久道は、国立国会図書館とアメリカ議会図書館のOPACを用いて、経済学や医学などの領域における索引付与の状況を調べている⁴⁾。藤田節子は、料理のレシピがまとめられた図書を対象として、その巻末索引を分析しており、索引に多くの課題があることを指摘している⁵⁾。小山憲司は、人文科学分野の図書を主に刊行する出版社の集まりである人文会が発行した文献目録に収録された図書を対象に、索引の付与を調べ、出版年や主題、ページ数、価格など

による違いを分析している⁶⁾。

以上の調査のほか、巻末索引の作成の実際についても、検討がなされてきた。まず、これまでに、参考となるマニュアルや方針が示されてきた。たとえば、1992年には、科学技術庁から、索引作成の基準が示された⁷⁾。さらに、日本索引家協会や藤田によって、索引作成のマニュアルが作られてきた⁸⁾。加えて、イギリスの索引家協会が開催した研修の記録も翻訳されてきた⁹⁾。そのほか、作成について、稲村徹元による論考のなかでも触れられている¹⁰⁾。また、藤田は、編集者や著者にインタビュー調査などを行い、索引作成における課題を明らかにしている¹¹⁾。

そして、巻末索引は、図書の読解に役立てられるだけではなく、研究のデータとしても用いられてきた。たとえば、朱心茹らは、図書館情報学に関する知識を測定するにあたって、テキストブックに付与された巻末索引を手がかりとしている¹²⁾。また、堀込静香は、図書館情報学のテキストブックにどのような索引語が見られるかを整理し、分析している¹³⁾。さらに、仲村拓真らは、司書養成科目である「生涯学習概論」や「図書・図書館史」について、テキストブックの巻末索引を分析し、各科目で扱われる知識について明らかにしている¹⁴⁾。実際、図書館情報学に限らず、テキストブックの巻末索引は、学問領域や教科の内容を分析するために参照されてきた¹⁵⁾。

以上の状況を整理すれば、巻末索引の付与については、繰り返し検討されてきたといえる。しかし、調査範囲が広い論考は、付与された索引の細かな状況には立ち入っていない。一方、レイアウトなどを詳細に調査したものは、いまだ成果の蓄積が少ないといえる。

1.2 研究の意義

司書養成科目のためのテキストブックに付与された巻末索引の形式的な特徴について明らかにする意義として、次の3点が挙げられる。第一に、索引付与の実態に関する先行研究の成果をより深く解釈することが可能となる。すなわち、従来の索引に関する研究で明らかとなった付与の実態に対して、新たなデータを加えることによって、巻末索引の実態をより正確に把握できる。とりわけ、図書館情報学では、索引は、情報や知識を組織化する手法として、研究対象のひとつになってきた。実際、索引に関する既存の論考は、図書館情報学の研究者によって発表されたものが少なくない。そのため、司書養成科目のテキストブックは、他の領域のテキストブックに比べて、索引が付与されていることが一般的であり、精緻に作られているのではないかと推測できる。したがって、司書養成科目のテキストブックを分析することで、高等教育のためのテキストブックにお

ける索引の水準がどの程度に達しているのかを推し量ることができる。

第二に、索引を手がかりとした研究への寄与が挙げられる。索引を手がかりとする研究において、索引の形式は、分析の前提となるはずである。そのため、司書養成科目のテキストブックにおける索引付与の実態を明らかにすれば、これらのテキストブックにおける索引を活用した研究の基礎を築くことができる。

第三に、索引作成の実際に対する貢献が考えられる。すなわち、司書養成科目のテキストブックにおける索引の標準的な状況を示すことで、今後の索引作成の参考とすることができる。

1.3 研究の方法

本論文では、司書養成科目のためのテキストブックに付与された索引を確認し、その形式的な内容を整理する。具体的には、次の3つのプロセスによって、分析のためのデータを取得する。すなわち、①分析するテキストブック一覧の作成、②分析項目の設定、③分析項目の記録、である。

最初に、司書養成科目に対応したテキストブックを網羅的に収集し、一覧を作成した。本論文の調査範囲は、図書館法によって司書資格に関する規定が定められた1950年から、調査を実施した2025年までとし、日本で刊行されたものを取り上げる。

テキストブックの索引を研究するにあたっては、何をテキストブックと見なすかが問題となる。そこで、本論文では、松本直樹によって2015年に公表されたテキストブック一覧をもとに¹⁶⁾、司書養成科目に対応したシリーズを対象とし、新たに刊行されたものを追加して、一覧を作成した。なお、「生涯学習概論」は、司書、学芸員、社会教育主事の各資格に共通する科目であるため、テキストブックが多く刊行されている。そこで、「生涯学習概論」については、司書養成科目のためのシリーズに含まれているテキストブックのみを対象とした。また、複数の版があるテキストブックについては、版の改訂によって、索引の形式が大きく変わることはほとんどないと推測し、基本的に、最新版を対象とすることとした。分析対象となったテキストブック数を出版社別に整理したものが、表1である。結果として、220点が分析対象となった。

表1 調査対象とするテキストブック数

出版社	冊数	割合
樹村房	33	(15.0)
日本図書館協会	33	(15.0)
東京書籍	32	(14.5)
学文社	27	(12.3)
教育史料出版会	19	(8.6)
ミネルヴァ書房	12	(5.5)
理想社	12	(5.5)
蘭書房	11	(5.0)
教育出版センター	11	(5.0)
勉誠出版	9	(4.1)
白石書店	7	(3.2)
学芸図書	5	(2.3)
青弓社	5	(2.3)
明治書院	4	(1.8)
計	220	(100.0)

出典：筆者作成。

次に、分析項目を設定した。設定した項目を整理したものが、表2である。分析項目は、大きく分けて、7つの観点から設定した。分析項目の設定にあたっては、最も詳細な項目を設定していた福永らと野末らの論考を参考とした。

第一に、テキストブックに関する基本的な情報として、出版者、出版年、大きさ、総ページ数、対応する司書養成科目を記録した。大きさは、cm単位の切り上げで記録した。また、総ページ数は、目次や巻末資料などと本文のノンブルが分けられている場合は、本文のページ数のみを記録した。

第二に、索引の付与に関する情報として、索引数、索引の種類、索引ページ数、目次への記載、凡例の有無、掲載位置を記録した。索引数を数えるにあたっては、改ページを索引の区切りと見なした。そのため、たとえば、日本語とアルファベットの索引語が、ページを改めず、続けて掲載されている場合は、1つと数えた。目次への記載とは、目次に索引があることが示されているどうかを確認したものである。掲載位置は、著者紹介や奥付などの掲載順序を見たとき、索引がどの位置にあるかを意味するものである。

第三に、見出し語に関する情報として、折りたたみにおける字下げの有無、副見出し語の有無、限定詞の有無、強調の有無、人名の倒置を記録した。副見出し語がある場合は、さらに、その表記、1字目の字下げ、主見出し語の省略、副々見出し語の有無、フォント、折りたたみにおける字下げについても確認した。

表2 調査項目

I. 基本情報	V. 相互参照
a. 出版者	a. を見よ参照
b. 出版年	b. をも見よ参照
c. 大きさ	VI. 所在指示
d. 総ページ数	a. 種類
e. 対応する司書養成科目	b. 区切り
II. 索引の付与	c. 継続
a. 索引数	i. 表記
b. 種類	ii. 省略
c. 索引ページ数	d. 記載位置
d. 目次記載	e. リーダ
e. 凡例	f. 強調
f. 掲載位置	VII. レイアウト
III. 見出し語	a. 文字組
a. 折りたたみ時の字下げ	b. 余白
b. 副見出し語	c. ポイント
i. 表記	d. 段数
ii. 1字目の字下げ	e. 柱
iii. 主見出し語の省略	i. 内容
iv. 副々見出し語	ii. ページ
v. フォント	iii. 位置
vi. 折りたたみ時の字下げ	f. ノンブル
c. 限定詞	
d. 強調	
e. 人名倒置	
IV. 排列	
a. 和文排列	
b. 区切り	
c. 排列見出し	

出典：筆者作成。

第四に、排列に関する情報として、和文の排列規則、区切りの有無、和文索引における排列見出しの有無を記録した。ここでいう区切りとは、見出し語の最初の文字が切替わったとき、空行や「カ行」などの見出しを挿入することを意味している。このとき、「か」、「カ行」など、挿入されている見出しを、便宜的に「排列見出し」と称した。

第五に、相互参照に関する情報として、を見よ参照とをも見よ参照の有無を記録した。それぞれ、参照がある場合には、その表記の仕方も確認した。

第六に、所在指示に関する情報として、種類、区切り、連続の有無、記載位置、リーダの有無、強調の有無を記録した。連続した所在指示がある場合は、その表記についても確認した。

第七に、レイアウトに関する情報として、本文と索引の文字組、余白、ポイント、段数、柱の有無、

ノンブルを記録した。柱がある場合には、その内容、記載されているページと位置も確認した。

最後に、以上の分析項目をもとに、記録票を作成した。そして、テキストブックを実際に確認して、調査結果を記録票に記入し、その内容を集計した。

2. 巻末索引の状況

2.1 索引付与の状況

結果として、索引が付与されていたテキストブックは、179冊（81.4%）であった。表3は出版社別、表4は出版年代別に、索引付与の状況を整理したものである。

まず、表3から、多くの出版社で、索引が付与されている割合が8割以上である一方、教育史料出版会、白石書店、青弓社から刊行されたテキストブッ

表3 出版社別索引付与の有無

	あり	割合	なし	割合	計	割合
樹村房	32	(97.0)	1	(3.0)	33	(100.0)
日本図書館協会	33	(100.0)	0	(0.0)	33	(100.0)
東京書籍	28	(87.5)	4	(12.5)	32	(100.0)
学文社	27	(100.0)	0	(0.0)	27	(100.0)
教育史料出版会	0	(0.0)	19	(100.0)	19	(100.0)
ミネルヴァ書房	12	(100.0)	0	(0.0)	12	(100.0)
理想社	9	(75.0)	3	(25.0)	12	(100.0)
蘭書房	11	(100.0)	0	(0.0)	11	(100.0)
教育出版センター	11	(100.0)	0	(0.0)	11	(100.0)
勉誠出版	8	(88.9)	1	(11.1)	9	(100.0)
白石書店	0	(0.0)	7	(100.0)	7	(100.0)
学芸図書	4	(80.0)	1	(20.0)	5	(100.0)
青弓社	0	(0.0)	5	(100.0)	5	(100.0)
明治書院	4	(100.0)	0	(0.0)	4	(100.0)
計	179	(81.4)	41	(18.6)	220	(100.0)

出典：筆者作成。

表4 出版年代別索引付与の有無

年代	あり	割合	なし	割合	計	割合
1950	11	(100.0)	0	(0.0)	11	(100.0)
1960	0	-	0	-	0	-
1970	12	(66.7)	6	(33.3)	18	(100.0)
1980	21	(67.7)	10	(32.3)	31	(100.0)
1990	22	(78.6)	6	(21.4)	28	(100.0)
2000	45	(83.3)	9	(16.7)	54	(100.0)
2010	45	(90.0)	5	(10.0)	50	(100.0)
2020	23	(82.1)	5	(17.9)	28	(100.0)
計	179	(81.4)	41	(18.6)	220	(100.0)

出典：筆者作成。

表5 大きさ別索引付与の有無

cm	あり	割合	なし	割合	計	割合
19	8	(88.9)	1	(11.1)	9	(100.0)
21	62	(67.4)	30	(32.6)	92	(100.0)
22	66	(86.8)	10	(13.2)	76	(100.0)
26	43	(100.0)	0	(0.0)	43	(100.0)
計	179	(81.4)	41	(18.6)	220	(100.0)

出典：筆者作成。

クは、索引が付与されていないことが読み取れる。このことから、出版社やシリーズの方針で、概ね、索引を付与するかどうかは決まっていると捉えられる。索引を付与していない出版社のテキストブックは、資料集や事例集というべきものであった。したがって、資料集や事例集には、索引が付与されにく

い傾向があるといえる。

つづいて、表4から、概ね、年代が新しくなるにつれて、索引が付与されている割合が向上していることが読み取れる。このことから、テキストブックを刊行するにあたって、索引を付与するべきという考えが浸透してきたと捉えられる。しかし、1950年

表6 索引数別テキストブック数

索引数	冊数	割合
0	41	(18.6)
1	155	(70.5)
2	22	(10.0)
3	2	(0.9)
計	220	(100.0)

出典：筆者作成。

表7 索引の種類別

種類	あり	和文	欧文	混合
事項索引	176 (98.3)	34 (19.0)	23 (12.8)	144 (80.4)
タイトル索引	11 (6.1)	8 (4.5)	3 (1.7)	3 (1.7)
その他	1 (0.6)	1 (0.6)	0 (0.0)	0 (0.0)

出典：筆者作成。括弧内は、索引が付与されたテキストブック数に対する割合。

代に刊行されたテキストブックに、すべて索引が付与されていたことをふまれば、1970年代以降は、索引が付与されていないテキストブックが流通するようになったともいえる。

表5からは、21cmのテキストブックにおいて、索引が付与されている割合が低いことがわかる。しかし、これは、21cmのテキストブックに、前述の資料集や事例集が多く含まれているためであり、実際には、大きさと索引付与に、関連は見出せない。

表6は、索引数別に、テキストブック数を集計したものである。最も多いのは、1つ（70.5%）であった。4つ以上の索引が付与されているテキストブックはなかった。

付与されていた索引の種類をまとめたものが、表7である。表7から、ほとんどのテキストブックでは、見出し語を分類せず、事項索引としてまとめていることがわかる。また、和文索引と欧文索引に分けず、和文と欧文を混ぜた索引が多いことも窺える。タイトル索引が付与されたテキストブックは、「児童サービス論」や「情報資源組織演習」など、児童書やレファレンスツールといった特定のタイトルを多く扱っている科目に付与されている。その他の索引としては、人名索引などが見られた。

表8は、索引ページ数別に、テキストブック数を集計したものである。また、表9は、索引ページ数の基本統計量をまとめたものである。表8および表9から、索引ページ数は、5ページ程度が多いといえる。しかし、表9から、索引が24ページあるテキストブックがみられる一方、索引が1ページのみ

表8 索引ページ数別テキストブック数

ページ数	冊数	割合
1	1	(0.6)
2	11	(6.1)
3	25	(14.0)
4	31	(17.3)
5	36	(20.1)
6	15	(8.4)
7	18	(10.1)
8	15	(8.4)
9	6	(3.4)
10～	21	(11.7)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。

表9 索引ページ数の基本統計量

平均値	5.9
中央値	5.0
最大値	24.0
最小値	1.0
標準偏差	3.3

出典：筆者作成。

のテキストブックもあることが窺える。なお、総ページ数に対する索引ページの割合は、平均値が2.8%、中央値が2.5%である。また、総ページ数と索引ページ数の相関係数は0.28であるから、総ページ数と索引ページ数は、弱い正の相関関係にある ($t = 3.68, df = 177, p < 0.01$)。このとき、相関係数の95%信頼区間は、 $[0.14, 0.41]$ である。

目次に索引があることが記載されているテキストブックは、162冊（90.5%）あった。したがって、索引がある場合、目次に索引があると示すことが一般的であると捉えられる。

索引に凡例が示されているテキストブックは、34冊（19.0%）であった。ここには、凡例と明示されていないなくとも、排列などについて、索引に説明が記されていれば、凡例があるとみなした。結果としては、説明のない索引が多いため、読者は、排列や参照について、索引から読み取らなければいけないことが生じているといえる。

表10は、テキストブックの巻末における索引等の掲載位置をまとめたものである。表頭の数字は、テキストブックの末尾から数えた位置を示すものである。たとえば、末尾から、広告、奥付、索引の順で並んでいた場合、広告を1、奥付を2、索引を3として記録している。「なし」は、表側の項目が掲載されていないことを示している。

表10から、ほとんどのテキストブックにおいて、

表10 索引等の掲載位置

	なし	1	2	3	4	5	6
索引	0 (0.0)	0 (0.0)	28 (15.6)	31 (17.3)	115 (64.2)	5 (2.8)	0 (0.0)
資料	51 (28.5)	1 (0.6)	0 (0.0)	14 (7.8)	25 (14.0)	87 (48.6)	1 (0.6)
あとがき	160 (89.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.1)	2 (1.1)	11 (6.1)	4 (2.2)
著者紹介	29 (16.2)	0 (0.0)	31 (17.3)	117 (65.4)	2 (1.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
奥付	0 (0.0)	59 (33.0)	118 (65.9)	2 (1.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
広告	60 (33.5)	118 (65.9)	1 (0.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

出典：筆者作成。括弧内は、索引が付与されたテキストブック数に対する割合。

表11 主見出し語の折りたたみの字下げ

	冊数	割合
あり	116	(64.8)
1	107	(59.8)
2	9	(5.0)
3	0	(0.0)
4	0	(0.0)
なし	19	(10.6)
判定不可	44	(24.6)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。点線内は内訳。

表12 副見出し語の1字目の字下げ

	冊数	割合
あり	84	(98.8)
1	55	(64.7)
2	23	(27.1)
3	6	(7.1)
4	0	(0.0)
なし	1	(1.2)
判定不可	0	(0.0)
計	85	(100.0)

出典：筆者作成。点線内は内訳。

あとがきは掲載されていないことがわかる。したがって、問題となるのは、索引、資料、著者紹介、奥付、広告の順序となる。表10のうち、それぞれ、最も数値が高い掲載位置は、索引が4（64.2%）、資料が5（48.6%）、著者紹介が3（65.4%）、奥付が2（65.9%）、広告が1（65.9%）である。したがって、標準的な掲載順序は、テキストブックの末尾から見て、広告、奥付、著者紹介、索引、資料の

表13 副見出し語における主見出し語の省略

	冊数	割合
省略なし	8	(9.4)
—	56	(65.9)
～	0	(0.0)
記載せず	20	(23.5)
その他	1	(1.2)
計	85	(100.0)

出典：筆者作成。

表14 副見出し語の折りたたみの字下げ

	冊数	割合
あり	14	(16.5)
1	10	(11.8)
2	3	(3.5)
3	1	(1.2)
4	0	(0.0)
なし	8	(9.4)
判定不可	63	(74.1)
計	85	(100.0)

出典：筆者作成。点線内は内訳。

順となると考えられる。

2.2 見出し語の状況

見出し語について、2行以上にわたる主見出し語があったとき、2行目以降の折りたたみに字下げがあるかを確認した。その結果をまとめたものが、表11である。「判定不可」は、2行以上にわたる主見出し語がなかったテキストブックである。

表11から、折りたたみがある場合、字下げをしているテキストブックが多いことがわかる。また、字

表 15 見出し語の強調

	冊数	割合
あり	6	(3.4)
太字	2	(1.1)
下線	1	(0.6)
斜体	2	(1.1)
フォント	1	(0.6)
その他	0	(0.0)
なし	173	(96.6)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。点線内は内訳。

表 16 人名の倒置

	冊数	割合
あり	93	(52.0)
なし	7	(3.9)
その他	19	(10.6)
判定不可	60	(33.5)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。

下げがある場合は、1字下げが最も多いことも読み取れる。ただし、字下げがないテキストブックも19冊(10.6%)ある。

次に、副見出し語の有無を確認したところ、85冊(47.5%)のテキストブックに、副見出し語が見られた。副見出し語の表記は、いずれも改行式であった。追込式のほうが、改行式よりも多くの見出し語を掲載できるが、副見出し語が見づらくなる。そのため、索引の見やすさが重視されていると考えられる。

表12は、副見出し語の1字目の字下げについて示したものである。「判定不可」は、箇所によって、字下げの有無が統一されていないものである。表12から、字下げがあるテキストブックがほとんどであり、1字下げが多いことが読み取れる。

副見出し語において、主見出し語の表現が省略されているかどうかをまとめたものが、表13である。表13において、省略がないテキストブックが8冊(9.4%)であることから、多くのテキストブックでは、主見出し語の表現を省略していることがわかる。また、省略の表記は、「——」が最も多い。

副見出し語のフォントは、すべて主見出し語と同一であった。したがって、フォントによって、主見出し語と副見出し語を識別できるテキストブックはないといえる。

副々見出し語があるテキストブックは、7冊(8.2%)であった。そのため、副々見出し語は、用いられないことが一般的であると考えられる。

表 17 和文索引の排列

	冊数	割合
五十音順	164	(91.6)
アルファベット順	15	(8.4)
その他	0	(0.0)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。

表 18 排列の区切り

	冊数	割合
あり	178	(99.4)
空行のみ	0	(0.0)
空行と見出し	166	(92.7)
見出しのみ	12	(6.7)
なし	1	(0.6)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。点線内は内訳。

表14は、2行以上にわたる副見出し語があるとき、折りたたみの字下げがあるかどうかをまとめたものである。「判定不可」は、2行以上にわたる副見出し語がなかったテキストブック数である。

副見出し語は、主見出し語と同一の表現が省略されやすいため、短くなりやすく、判定不可が多くなったと考えられる。表14から、折りたたみがある場合は、字下げがあるものが多いことが読み取れる。

本論文では、同一の表現となる見出し語を区別するための限定詞が用いられているかどうか調査した。しかし、実際には、159冊(88.8%)のテキストブックにおいて、見出し語に括弧が添えられているものの、限定詞として捉えられるかどうか、判別しづらいものが散見された。

表15は、見出し語が示す概念の重要性を表現するために、見出し語における強調が用いられているかどうかを確認した結果である。表15から、強調は、ほとんど用いられていないことがわかる。また、用いられている場合、その方法は多様であることも読み取れる。

見出し語において、人名の倒置がなされているかどうかをまとめたものが、表16である。「判定不可」は、人名と捉えられる見出し語がなかった、あるいは、ファミリーネームのみの表記で、倒置が確認できなかったテキストブックを意味する。表16から、人名を表す見出し語がある場合、倒置されることが多いといえる。

2.3 排列の状況

表17は、和文索引における排列規則を示したものである。表17から、最も多い排列は、五十音順であ

表19 排列見出し

	冊数	割合
あり	178	(99.4)
ア行, カ行	52	(29.1)
ア, カ	76	(42.5)
ア, イ	28	(15.6)
A, B	16	(8.9)
その他	6	(3.4)
なし	1	(0.6)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。点線内は内訳。

表20 を見よ参照の表記

	冊数	割合
を見よ	2	(2.4)
～参照	0	(0.0)
矢印	75	(88.2)
その他	8	(9.4)
計	85	(100.0)

出典：筆者作成。

ること、また、五十音順とアルファベット順以外の排列規則は見られなかったことがわかる。なお、アルファベット順を採用しているテキストブックは、1950年代から1970年代に刊行されたものが多いため、和文索引をアルファベット順とすることは、次第に廃れていったと考えられる。

表18は、見出し語の排列において、何らかの区切りがあるかどうかを確認した結果である。表18から、まず、ほとんどのテキストブックにおいて、索引には、区切りがあることがわかる。さらに、その区切りは、空行と排列見出しによるものが一般的であることが読み取れる。

つづいて、表19に、排列見出しの内容について示した。結果として、「ア, カ」や「ア行, カ行」のように、行ごとに区切ることが多いといえる。

2.4 相互参照の状況

を見よ参照, をも見よ参照について、有無を確認したところ、を見よ参照は85冊(47.5%)、を見よ参照は19冊(10.7%)で用いられていた。そこで、その表記をまとめたものが、表20と表21である。なお、「矢印」については、実際には、「→」, 「⇒」など、いくつかの種類が見られるが、表20と表21では、一方向の矢印をまとめて集計している。

表20から、を見よ参照の場合、矢印が用いられることが多いといえる。一方、表21から、を見よ参照の場合、表記は多様であることが窺える。「その他」として、両方向の矢印(⇔)や、矢印と「をも

表21 をも見よ参照の表記

	冊数	割合
を見よ	2	(10.5)
～も参照	0	(0.0)
矢印	5	(26.3)
矢印:	3	(15.8)
その他	9	(47.4)
計	19	(100.0)

出典：筆者作成。

表22 所在指示の区切り

	冊数	割合
カンマ	170	(95.0)
スペース	1	(0.6)
その他	7	(3.9)
判定不可	1	(0.6)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。

表23 連続する所在指示の表記

	冊数	割合
—	73	(85.9)
～	9	(10.6)
以下	0	(0.0)
その他	3	(3.5)
計	85	(100.0)

出典：筆者作成。

見よ」を組み合わせたもの(→……を見よ)が見られた。

2.5 所在指示の状況

まず、所在指示の内容を確認したところ、すべてノンブルを指すものであった。実際には、章や節、ユニットなどの番号を使うことも考えられるが、一般的な索引と同様に、ノンブルが採用されていることがわかる。

つづいて、同一の見出し語に対して、複数の所在指示がある場合に、どのような区切りが用いられているかを確認した。その結果をまとめたものが、表22である。「判定不可」は、すべての見出し語の所在指示が、1か所ずつしかないテキストブックを意味する。

表22から、区切りは、カンマ(,)が一般的であるといえる。「その他」としては、読点(,)や中黒(・)が用いられていた。

連続するページが所在指示として用いられているテキストブックは、85冊(47.5%)あった。その表記をまとめたものが、表23である。表23から、連続

表 24 所在指示の記載位置

	冊数	割合
直後	111	(62.0)
右揃え	27	(15.1)
混在	41	(22.9)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。

表 25 本文に対する索引の余白

	冊数	割合
広い	0	(0.0)
同じ	158	(88.3)
狭い	21	(11.7)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。

表 26 本文に対する索引のポイント

	冊数	割合
大きい	0	(0.0)
同じ	16	(8.9)
小さい	163	(91.1)
計	179	(100.0)

出典：筆者作成。

するページは「-」（ダッシュ）で接続されていることが多いといえる¹⁷⁾。「その他」として、「f」などの記号を付して、その後の類出を表しているものもあった。なお、連続するページを表記する場合、終わりのページの桁を省略することがあり得るが、省略が用いられているのは、4冊（4.7%）のみであった。

表24は、所在指示の記載位置についてまとめたものである。「直後」は見出し語のすぐ後に、「右揃え」は、各段の右側に揃えて、それぞれ記載してあることを意味する。

表24から、最も多いのは、見出し語の直後であることがわかる。ただし、直後と右揃えの両方が混在しているものも41冊（22.9%）あり、見出し語の長さなどによって、記載位置を調整しているものがあることが窺える。

見出し語と所在指示の間に、リーダー（……）を用いているものは、17冊（9.5%）あった。裏を返せば、見出し語と所在指示の間は、何も記載しないことが多いといえる。

重要な箇所を示すなど、所在指示の強調が用いられているものは、20冊（11.2%）あった。このうち、強調の表記は、すべて太字によるものであった。

表 27 索引の段数

cm	段数			計
	1	2	3	
19	0 (0.0)	8 (100.0)	0 (0.0)	8 (100.0)
21	0 (0.0)	34 (54.8)	28 (45.2)	62 (100.0)
22	0 (0.0)	36 (54.5)	30 (45.5)	66 (100.0)
26	0 (0.0)	29 (67.4)	14 (32.6)	43 (100.0)
計	0 (0.0)	107 (59.8)	72 (40.2)	179 (100.0)

出典：筆者作成。括弧内は、各大きさのテキストブック数に対する割合。

表 28 柱の位置

	冊数	割合
左頁左上	12	(7.5)
左頁中央上	7	(4.4)
左頁右上	0	(0.0)
左頁左中央	0	(0.0)
左頁左下	43	(27.0)
左頁中央下	0	(0.0)
左頁右下	0	(0.0)
右頁左上	0	(0.0)
右頁中央上	26	(16.4)
右頁右上	79	(49.7)
右頁左中央	0	(0.0)
右頁左下	0	(0.0)
右頁中央下	0	(0.0)
右頁右下	45	(28.3)

出典：筆者作成。

2.6 レイアウトの状況

レイアウトについて、まず、本文と索引の文字組を確認したところ、すべて横組みであった。つづいて、本部と索引の余白を比較し、整理したものが、表25である。表25から、余白も、本文と索引で相違ないことが多いといえる。

表26は、索引における活字のポイントを本文と比較した結果である。表26から、ポイントは、本文よりも小さいことが一般的であると捉えられる。

表27は、大きさ別に、索引の段数をまとめたものである。表27から、すべてのテキストブックにおいて、複数の段が設定されており、最も多いのは、2段であることがわかる。また、4段以上で組まれているテキストブックはなかった。大きさ別に見れば、小さいほうが段数が多いように読み取れる。これは、

紙面が小さい場合、索引語をより多く掲載するために、段数を増やしたのではないかと捉えられる。段の間に仕切り線が用いられているテキストブックは139冊(77.7%)あった。

索引に、何らかの柱が記載されているテキストブックは、159冊(88.8%)あった。そこで、記載位置をまとめたものが、表28である。最も多い記載位置は、右ページの右上であった。

最後に、索引のノンブルについて確認したところ、すべてのテキストブックにおいて、索引にノンブルがあった。また、ノンブルは、すべて本文と連続しており、表記も同一であった。

2.7 巻末索引の特徴

ここまで、テキストブックの巻末索引について、状況を示してきた。まず、索引の付与率について考えれば、司書養成科目のテキストブックでは、他の主題の刊行物に比べて高いと考えられる。先行研究で示されてきた付与率は、図書館の主題によって異なるものの、5割から6割程度であるのに対し、司書養成科目のテキストブックでは、8割を超えている。このことは、図書館情報学を主題としていることと、テキストブックであることの両方が影響していると考えられる。なお、索引が付与されていないテキストブックは、資料集や事例集が多かったが、これらにも索引を付与することは、有用であるといえる。

また、索引の作成にあたっては、見やすさと収録数が調整されていることが窺える。主見出し語を適宜字下げしたり、副見出し語の表記に改行式を採用したりすることは、紙幅を費やすことにつながるが、見やすさは高まる。一方、活字のポイントを小さくしたり、複数の段を設けたりすることは、多くの語を掲載することを可能にする。すなわち、見やすさを確保しつつ、索引語数を増やすことが目指されている。単純には比較できないものの、これらの工夫は、他の主題の図書でも認められるものである。

副見出し語や見よ参照については、先行研究で示された他の主題の図書よりも、導入されている割合が高いといえる¹⁸⁾。ただし、参照については、見よ参照は5割程度、見よ参照は9割程度のテキストブックが採用していないことから、全体として、まだ十分に普及していない様子が窺える。参照は、検索の効率を向上させるとともに、概念間の関係を把握することに有用である。しかし、十分な参照を示すには、索引作成にかかる時間が増えると考えられるため、示されないことも多くあると考えられる。

全体として、形式にばらつきは少なく、概ね、共通した形式で、索引が付与されていたと捉えられる。そこで、ここまで示した結果をもとに、司書養成科目のためのテキストブックにおける索引の標準的

な形式についてまとめれば、次のとおりとなる。すなわち、索引の付与については、総ページ数に対して2.5%程度のページ数で、広告、奥付、著者紹介の前に索引を設け、目次に索引があることを示す。見出し語については、2行以上にわたるときは字下げをし、副見出し語は改行式で記載し、主見出し語と同一の表現は「—」で省略し、人名に関する見出し語は倒置する。排列については、和文索引は五十音順とし、行ごとに、空行と排列見出しで区切る。相互参照を用いるときは、矢印で示す。所在指示は、ノンブルで示し、連続するページは「-」でつなぎ、複数の所在指示は「,」で区切り、見出し語と所在指示の間には、何も記載しない。レイアウトについては、横組みとし、本文よりも小さいポイントを用い、2段以上で並べ、各段の間には仕切り線を入れる。さらに、索引のページにも、柱とノンブルを入れ、ノンブルは、本文と連続させ、同一の表記とする。

3. 結論および今後の課題

3.1 結論

本論文では、司書養成科目のためのテキストブックに付与された巻末索引の形式的な特徴を明らかにすることを目的として、日本で刊行された実際のテキストブックを参照し、その内容を分析した。結果として、まず、他の主題に比べ、多くのテキストブックに索引が付与されていたことが明らかとなった。つづいて、分析の観点ごとにみれば、見出し語については、字下げや改行式の表示などにより、見やすさが確保されていた。また、副見出し語は、他の主題の図書に比べ、しばしば用いられていたが、副々見出し語は、ほとんど見られなかった。排列については、和文索引は、五十音順で並べ、行ごとに区切られることが標準的であった。所在指示については、ノンブルが用いられ、ダッシュやカンマによって表記され、強調が用いられることも見られた。相互参照については、他の主題の図書に比べれば、多くみられるものの、まだ十分に普及していないことが判明した。レイアウトについては、複数の段が設定されるなど、多くの見出し語を掲載する工夫が施されていることが一般的であった。

3.2 今後の課題

本論文の成果を発展させるために、次の3点が有意義であると考えられる。第一に、索引語の詳細を検討することである。本論文は、形式的な特徴に焦点を合わせたため、どのような索引語が見られたかは検討していない。どのような概念が、どのような索引語として表現されているかを分析することは、

索引を作成するにあたって、重要な観点であると捉えられる。

第二に、索引付与の調査を他の領域に拡大することである。先行研究においても、索引付与の状況が報告されてきたが、十分な調査が行われているとはいえない状況にある。したがって、本論文で対象とした図書館情報学以外の領域についても、検討の余地がある。また、図書館情報学に関するテキストブックについても、司書教諭資格を取得するための科目など、分析を拡げ、本論文の成果をさらに検証することが考えられる。

第三に、索引の作成過程についても調査することである。作成された索引に関する分析は積み重ねられつつあるが、作成の実際については、成果に限られている。どのようなプロセスや意識によって、テキストブックの索引が作られているのかを明らかにすることによって、本論文の成果を深めることができよう。

注

- 1) 福永智子ほか「わが国の単行書巻末索引の実態」『書誌索引展望』vol. 14, no. 3, 1990. 8, p. 1-22.
- 2) 野末俊比古ほか「わが国の単行書巻末索引のレイアウト」『書誌索引展望』vol. 16, no. 4, 1992. 11, p. 1-25.
- 3) 阿部悦子「人文科学, 社会科学, 科学・技術分野における巻末索引の質的な特徴」『四国大学紀要: 人文・社会科学編』no. 14, 2000. 12, p. 97-130.
- 4) 山崎久道『情報貧国ニッポン: 課題と提言』日外アソシエーツ, 2015, 230p.
- 5) 藤田節子「料理本の巻末索引の調査分析」『情報の科学と技術』vol. 67, no. 2, 2017. 2, p. 82-88.
- 6) 小山憲司「国内発行の人文社会科学分野図書の巻末索引の現状と特徴」『中央大学社会科学研究所年報』no. 26, 2022. 9, p. 1-13.
- 7) 科学技術庁科学技術振興局科学技術情報課編『科学技術情報流通技術基準: SIST 13: 索引作成』日本科学技術情報センター, 1992, 28p.
- 8) 日本索引家協会編『索引作成マニュアル』日外アソシエーツ, 1983, 237p.; 藤田節子『本の索引の作り方』地人書館, 2019, 171p.
- 9) G. ノーマン・ナイト編; 日本索引家協会監修; 藤野幸雄訳『索引: 作成の理論と実際』日外アソシエーツ, 1981, 232p.
- 10) 稲村徹元『索引の話』日本図書館協会, 1977, 178p.
- 11) 藤田節子「図書の索引作成の現状: 編集者と著者への調査結果から」『情報の科学と技術』vol. 68, no. 3, 2018. 3, p. 135-140.
- 12) 朱心茹ほか「専門語彙量推定テストの開発と評価: 図書館情報学分野を対象として」『日本図書館情報学会誌』vol. 69, no. 4, 2023. 12, p. 186-203.
- 13) 堀込静香「索引と索引語と検索: 図書館学テキストの内容索引の分析と考察」『鶴見大学紀要: 人文・社会・自然科学編』no. 38, 2001. 3, p. 91-102.
- 14) 仲村拓真, 吉岡一志「「生涯学習概論」で扱われる知識の検討: テキストブックの索引語を手がかりとして」『山口県立大学基盤教育紀要』no. 3, 2023. 3, p. 77-96.; 仲村拓真, 吉岡一志「「図書・図書館史」で扱われる知識の検討: テキストブックの索引語を手がかりとして」『山口県立大学基盤教育紀要』no. 4, 2024. 3, p. 511-525.
- 15) 浦田広朗「大学教科書の問題」片岡徳雄編著『教科書の社会学的研究』福村出版, 1987, p. 204-221.
- 16) 松本直樹「司書養成テキストの一覧」根本彰監修; 中村百合子ほか編著『図書館情報学教育の戦後史: 資料が語る専門職養成制度の展開』ミネルヴァ書房, 2025, p. 854-879.
- 17) 印刷されたENダッシュと半角ハイフンを視覚的に判別することは難しいが、本論文では、SIST 13に基づき、すべてダッシュとして集計した。
- 18) 福永らの調査では、副見出し語がある索引の割合は、41.9%であった。同様に、を見よ参照がある索引の割合は、17.1%であった。前掲1), p. 15.